

男のコーヒーアカデミー

前年度、好評をいただいた「男のコーヒーアカデミー」
「ぜひもう一度やって欲しい」という地域のリクエストに
応え、令和8年度も開催します！

- コーヒーの種類・産地など基礎知識、コーヒー豆を買う際のアドバイスなどの講義
- 講師が入れたコーヒーをみんなで飲み比べ
- グループに分かれてハンドドリップ練習
- 自分が淹れたコーヒーをみんなに飲んでもらう など

※前回は3日間の日程でしたが、今回は日程を増やしさらに参加者同士が交流を深めてもらえるようなプログラムを計画しています。

～前回のアカデミーの様子～



【資料2-2】
西山手高齢者生活支援センター

アカデミー卒業生活躍中！

地域のつどい場や自治会のイベントなどに声をかけていただきハンドドリップを披露。
地域と繋がりを持つことができたり、自分の淹れたコーヒーで喜んでくれる人がいることが励みになっていると積極的に参加してくださっています。

「あしやの会」



認知症当事者の会@喜楽苑

「つどい場 みつつ」



認知症カフェ
@前田集会所

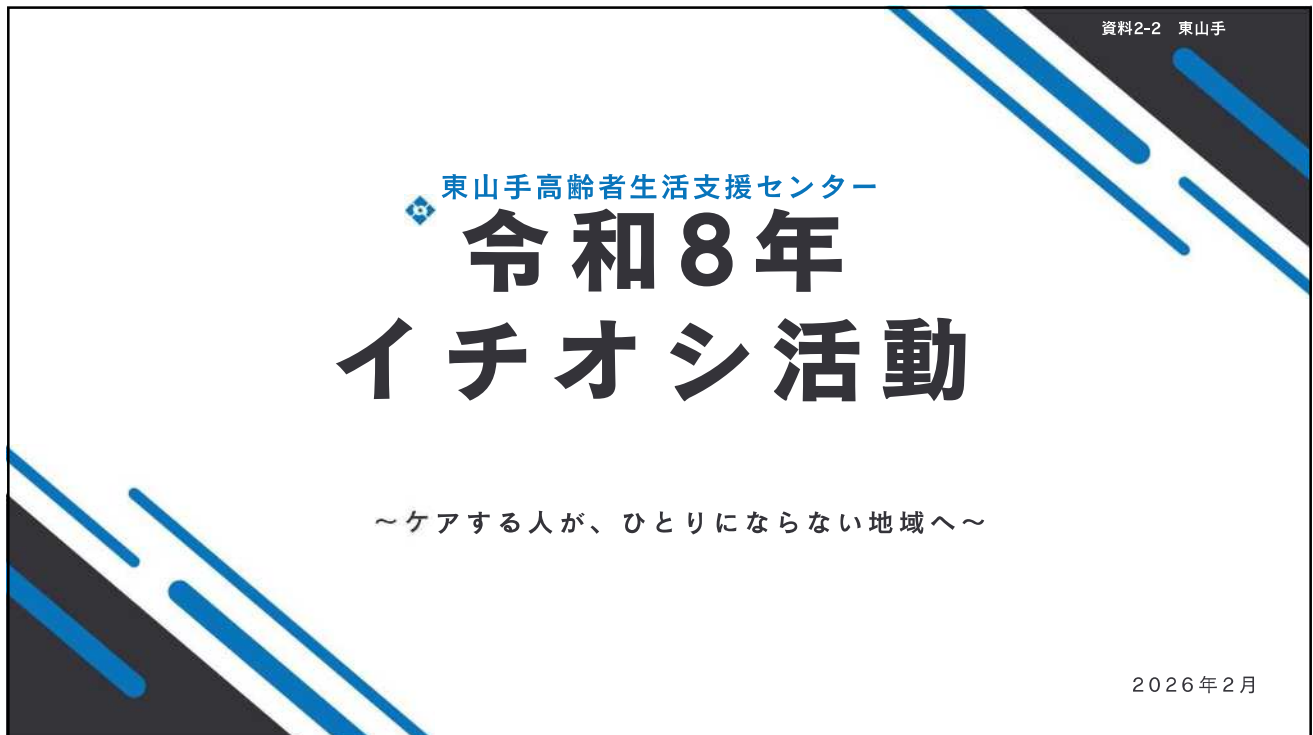
淹れたてコーヒーに場が和みます

「芦屋市郵便局長会議」




講師としてハンドドリップの実演



地域貢献のきっかけを探していた局長がコーヒーアカデミーのことを知り講師として依頼いただきました。



令和8年度 東山手高齢者生活支援センター

イチオシ活動



イチオシ活動の概要	現況（背景）・課題・理由
<div style="display: flex; align-items: flex-start;">  <div> <p>東山手高齢者生活支援センターでは、家族介護者等(ケアラー)が日常の介護負担や悩みを一人で抱え込むことなく、地域の中で気軽に立ち寄り、思いや状況を話せる場として「ケアラーズカフェ」を開催します。(予定…)</p> <p>この活動は、専門的な相談の場として構えるのではなく、誰もが自然体で参加できる居場所づくりを重視し、参加者同士の緩やかなつながりや安心感の醸成を図ることを目的とします。あわせて、日常的な会話や交流を通じて相談につながる関係性を育み、必要に応じて地域包括支援センターの相談支援機能を生かした適切な支援や早期の相談につなげていきたいと考えています。</p> </div> </div>	<p>高齢化の進行や世帯構造の変化により、家族介護者等(ケアラー)は介護負担を一人で抱え込みやすく、相談につながらないまま孤立しているケースがみられます。</p> <p>また、地域包括支援センターは専門相談機関としてのイメージが強く、日常的な悩みや小さな困りごとを気軽に相談しにくい状況があるのではないかと考えています。</p> <p>このため、相談前段階の「ゆるやかな入口」となる居場所を地域の中に設け、家族介護者が安心して立ち寄れる環境を整えることが、早期支援や地域支援体制の強化につながると考え、この活動を企画しました。</p> <div style="text-align: right;">  </div>

令和8年度 東山手高齢者生活支援センター



イチオシ活動

目標

家族介護者等(ケアラー)が一人で抱え込まず、地域で気軽に立ち寄って話ができて、必要な支援につながっていただける環境づくりを目指します



取り組み体制

- ・東山手高齢者生活支援センター職員(主任介護支援専門員、社会福祉士、保健師等)が中心となり企画・運営を行います
- ・医療・介護・福祉関係職種、地域の関係機関、ボランティア等と連携した運営を行います
- ・参加者同士の交流を尊重しつつ、専門職は「支える側に徹しすぎない」関わりを意識し、自然な見守りと相談支援を行います



令和8年度 東山手高齢者生活支援センター



イチオシ活動

取り組み内容

- 【1】定期的に「ケアラーズカフェ」を開催し、飲み物や軽食を囲みながら自由に過ごせる場を提供する
- 【2】専門的な相談を前面に出さず、参加者が構えずに話せる雰囲気づくりを大切にする
- 【3】参加者同士の何気ない会話や交流を通じて、孤立感の軽減や安心感の醸成を図る
- 【4】会話の中で支援ニーズが把握された場合には、本人の意向を尊重しながら、個別相談や関係機関につなぐ
- 【5】継続的な開催を通じて、地域におけるケアラー支援の拠点としての認知を高める



取り組みプロセス

- 【第1段階】 入口づくり(参加のハードルを下げる)
 - ・ねらい 「相談」ではなく「立ち寄り」の位置づけを明確にする。
- 【第2段階】 関係づくり(安心して話せる空気をつくる)
 - ・ねらい 介護者が“正解を求めなくていい場”だと感じられること。
- 【第3段階】 気づきの促進(自己流介護からの“ゆらぎ”)
 - ・ねらい 「このやり方しかない」から「他の選択肢もあるかもしれない」へ。
- 【第4段階】 相談への橋渡し(自然な支援接続)
 - ・ねらい 深い相談になりすぎない(つなぎの意識)
- 【第5段階】 継続と地域への還元
 - (包括としての役割発揮)
 - ・ねらい 個別支援で終わらず、地域支援に活かす。





1

背景

ある利用者宅に訪問。
パジャマ姿での出迎え。
家で着る服がなく買い
にも行けず頼む人もい
ない。

民生委員より1人暮らし
で買い物できていない
人がいると聞いた

2

目的

- ・「選び・買う・喜び」の再獲得
- ・ 外出機会づくり
- ・ 健康維持・認知症予防

3

今後の
スケ
ジュール

- ・ 実態調査・
ニーズ把握
(上半期)
- ・ 企画→お試
しでイベント実
施(下半期)

4

実態調査について

アンケート調査実施

「集いの場」や「さわやか教室」「テニスコート」などでフォーカスグループインタビューを実施

5

ターゲット年齢

アラ還(60歳手前)～後期高齢者の男女の方

6

例えば・・・



1. 移動店舗による
直接買い物体験



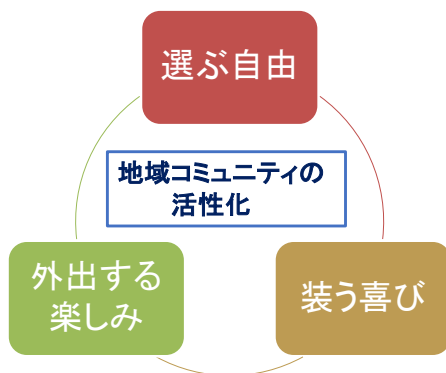
2. 集まってカタログ
注文体験会



3. スマホサポーター
の活躍の場

7

期待される成果



8

資料 2 - 2

地域への 種まきレポート

潮見高齢者生活支援センター

1

1 地域包括の周知活動

Approach

2 地域の集まりに参加

3 おでかけ講座開催

4 ボッチャ流行っている？

5 スマホで困っている人多くない？

2

センターの取り組み

summary



3

お出かけ講座
年2回以上開催
するぞ！

ボッチャ体験会
チームを作るぞ！

スマホ相談会開催
場所を増やすぞ！

新地域の集まり
に積極的に参加
するぞ！



continue

4

1 概要

- ・地域包括支援センターから地理的に離れた地域に居住する高齢者等を対象に、「出張相談」を実施する。
- ・来所が困難な高齢者等の相談機会を確保し、早期発見・早期支援につなげるとともに、地域住民や関係者との顔の見える関係づくりを進める。

2 現況(背景)・課題・理由

- ・センターが圏域中心部にあり、遠方地域からは来所しにくい。
- ・交通手段や身体的理由により、相談につながらない高齢者がいる。
- ・支援が必要でも把握できていない潜在的ケースが存在する。
- ・相談につながらず、課題が深刻化してから発見されるケースがある
→ センター側から地域へ出向くアウトリーチ型支援が必要。

3 目標

- ・相談機会の拡充
- ・早期発見・早期対応の推進
- ・地域との連携強化
- ・地域課題の把握と施策への反映

4 取り組み体制

- ・地域包括支援センター職員によるチーム対応
- ・民生委員・福祉推進員・自治会等との協力体制の構築
- ・相談内容に応じ、医療機関、介護事業所、権利擁護機関等へ円滑に接続する体制を整備

5 取り組み内容

- ・定期的な出張相談会の開催
- ・総合相談・個別相談の実施
- ・周知活動
- ・地域課題の把握
- ・効果検証

- 地域包括支援センターの業務の中心は「対人援助」であり、マニュアル化しきれない“属人的な業務”が多い。言い換えると、「〇〇さんならうまくいくが、△△さんでは難しい」と表現されるような仕事である。
- 特定のクライアントへの支援プロセスにおいて、ある職員が暗黙知を活かして実践を組み立てられても、そのプロセスを他の職員が再現できるとは限らない。どのようなスキルを使って実践したのかが目に見えにくいためである。特に「クライアントとの援助関係形成」は、この“見えにくさ”が顕著に表れる。
- しかし、ケース検討会や支援者会議、地域ケア会議などで、この部分が具体的に扱われることは少ない。結果として、経験の浅い職員は、経験豊富な先輩の実践を“背中を見て学ぶ”というスタイルが一般的になっている。本来であれば、より科学的な実践手法として「スーパービジョン」が期待されるが、現場で効果的なスーパービジョンが行われているケースは多くない。
- そこで、センター職員のスキルアップに向けて、既存の会議体を“リノベーション”し、職員が求められるスキルをより効果的に身につけられる機会を創出することをめざす。

Point ①



省察的実践サイクル（①実践、②ふり返り、③学び、④次の実践への試行）を基盤とする

Point ②



業務過多なセンターに負担を増加させないよう、既存のプログラムをリノベーションする

Point ③



“その研修・会議の場”だけでなく、応用して自センターに活かすことができるようにする

参考 「ソーシャルサポートの機能分類」をもとにした地域ケア会議、事例検討会に期待される支援者支援機能

サポートの機能別分類名	サポート機能の説明	サポートを行うために必要な技術	地域ケア会議	事例検討会	解説
(1)自己評価サポート	自分の能力・社会的魅力や仕事でのパフォーマンスに疑いを持ったときに働く。	<ul style="list-style-type: none"> 傾聴 感情・事実の反射，共感 再保証 非審判的態度の保持など 	△	◎	事例提出者として自分の実践上の悩みや困りごとを語り、それを丁寧に受け止めてもらうプロセスを通してクライアントの置かれている状況を疑似的に体感できる。自分の成長課題に気づくことも。
(2)地位のサポート	自分が何らかの役割を果たしていることで得られるサポート	<ul style="list-style-type: none"> 相手に役割を与えること 役割を果たしている相手を認めること 		△	事例検討会では、課題検討が深化した場合、ごく稀に業務（対人援助実践）を通して「自らが何を得ているか」について確かめるような機会となる場合がある。
(3)情報のサポート	問題の本質，問題に関係している資源に関する知識，代替的な行動に至る道筋に関する情報を提供すること	<ul style="list-style-type: none"> 適切な情報ネットワークを持っていること 相手のニーズに見合った情報を見つけ出すこと 	◎	○	自分が知らなかった問題解決に役立つ可能性のある社会資源や具体的な手立てに関して、検討メンバーから有効な助言を受けられる可能性がある。また、問題発生の中核的要因や問題解決の方向性等について示唆を受けられる可能性がある
(4)道具的サポート	実際的な課題に対する援助の提供	相手に必要な具体的な援助力を持っていること（例：労働力，お金など）	△		地域ケア会議には、原則として現在かかわっている人や今後かかわる可能性がある人が出席するため、場合によってはその人が新たに道具的サポートを提供してもらう機会となる可能性がある。
(5)社会的コンパニオン	共に出かけたり，何かをしたりする相手，社会活動のサポート	<ul style="list-style-type: none"> コンパニオンとして使える時間の所有 相手にとって重荷にならないこと 	△		道具的サポート同様、地域ケア会議には直接支援にかかわる人が参加しており、検討結果によっては社会的コンパニオンを受けられる可能性があるが、事例検討会では起こり得ない。
(6)モチベーションのサポート	根気よく継続する解決の道を選びたい相手に相手のモチベーションを高めるサポート	<ul style="list-style-type: none"> 励まし 努力の結果の予測とその再保証 一緒に乗り切ろうというメッセージの伝達 	△	◎	事例検討会は、地域ケア会議と異なり事例提出者に焦点を当てるため、「事例提出者と一緒にじっくり考える」という立ち位置を基本としており、そのこと自体が再保証の機会といえる。